

3) 野 菜 作

春だいこんの品種とは種期について

1 試験のねらい

春だいこんの栽培は年々前進化してきたが、この時期の作型では抽だい回避が栽培上大きな問題である。そこで、品種、は種期及び栽培様式の違いが春だいこんの花芽分化、抽だい及び収穫期に及ぼす影響を昭和57年に本場（宇都宮市）と佐野分場（佐野市）で検討し、両地域別の栽培可能な種の早期限界を明らかにした。

2 試験方法

品種は耐病総太り、春王及び天春を用い、12月10日から4月10日まで1カ月間隔に5回は種し、それぞれのは種期に応じハウス、トンネル、マルチ及び露地の栽培様式を組合せた計24処理を設けた。ただし、栽培様式別の供試資材は図-1に示した。栽植距離はハウスが畝幅120cm、株間30cmの4条千鳥まき、トンネル、マルチ及び露地は畝幅90cm、株間30cm、条間45cmの2条千鳥まきとし、施肥量は三要素ともa当たり成分量で1.5kg施用した。試験規模は1区60～100株で実施したが、花芽分化は7日毎に1回10個体を供試し、抽だいは花らいが頂観で50%の株に認められた時期とした。

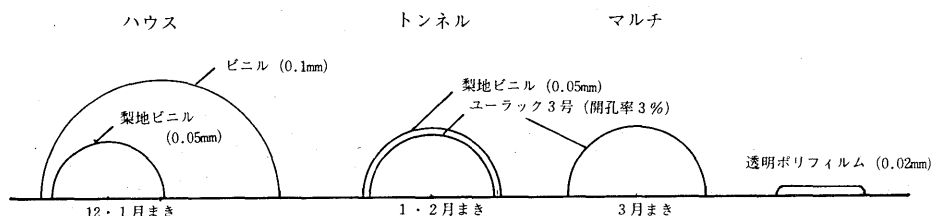


図-1 栽培様式別の供試資材

3 試験結果及び考察

花芽分化及び抽だい期は、耐病総太り、春王、天春の順に早かったが、4月10日まき以外、早いは種期ほど花芽分化及び抽だい期までは種後所要日数が長い傾向を示した。一方、本場と佐野分場間の地域的な差は、花芽分化及び抽だい期とも一定の傾向を認めず判然としなかった。

は種期及び栽培様式の違いによる収穫期の判定については表-1に示した。収穫期が抽だいのため目標に達せず収穫不能となった時期があり、それは耐病総太りで多く、天春は比較的少なかった。なお、収穫不能時期は県南部の佐野分場に比べ本場で多く、収穫期も佐野分場でやや早まる傾向であった。

以上より、当地域の春だいこん栽培には、晩抽性の天春が最も適し、当は種期内では県中部のマルチ3月まきを除き栽培は可能と思われる。ただし、その他の品種では抽だいにより収穫不能とな

るは種期があるため、県中部では春王はハウスで12月中旬、トンネルで2月中旬、マルチで4月中旬、耐病総太りはハウスで1月中旬がは種の早期限界であった。県南部では春王は供試は種期内は栽培可能であったが、耐病総太りはハウスで1月中旬、2重トンネルで2月中旬、マルチで4月中旬がは種の早期限界であった。

4 成果の要約

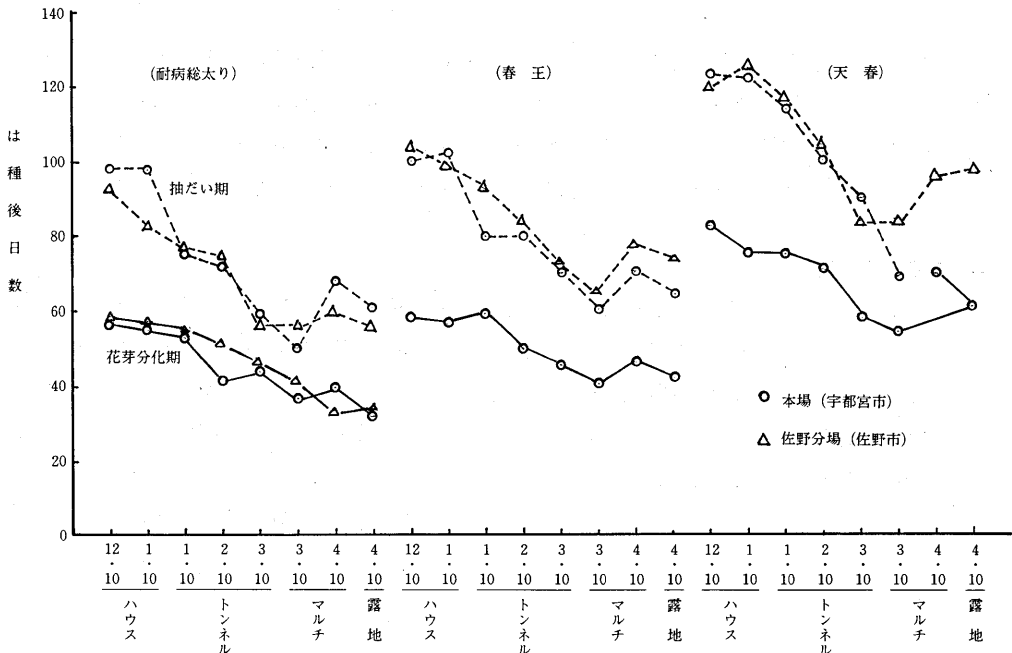
本県における春だいこんの地域別栽培可能時期を明らかにするため、本場と佐野分場で、品種及び栽培様式別の早期は種の限界を検討した結果、両地域とも天春が安定しており、天春を使うことによってハウスで12月中旬からの栽培が可能であった。

(担当者 野菜部 室井栄一 佐野分場 塩谷民一)

表一 収穫期の判定

場所	品 種	ハウス		トンネル			マルチ		露地
		12・10	1・10	1・10	2・10	3・10	3・10	4・10	4・10
本 場 (宇都宮市)	耐病総太り	※	4・上	※	※	※	※	※	※
	春 王	3・中	4・上	※	4下~5上	5・中	※	6・上	6上~中
	天 春	3・中	4・上	4・中	4・下	5・中	※	5下~6上	6・上
佐 野 分 場 (佐野市)	耐病総太り	※	4・中	※	4・下	※	※	6・上	※
	春 王	3・中	4・上	4・中	4・下	5・中	5・中	6・上	6・上
	天 春	3・中	3・下	4・上	4中~下	5上~中	5・中	5・下	6・上

注1 根重 800 g を目標とした。
2 ※は抽だいのため収穫不能。



図一 2 花芽分化期と抽だい期までの種後所要日数